

本科 2 期 9 月度

解答

Z会東大進学教室

# 高 1 東大 国語



## 【問題】(演習)

出典：『徒然草』第三十二段 / 同志社大学・法学部・改

## 現代語訳

九月二十日のころ、(私は)あるお方に誘われ申し上げて、夜の明けるまで月を見てぶらぶらしておりましたところ、(その方は)ふとお思い出しになった場所(お宅)があつて、(供の者に)取り次ぎを頼ませて(その家に)お入りになった。荒れている庭で露がいっぱいおりているところに、来客があつてあわてて焚いたとも思えない香りがしんみりかおつて、(この家の主人が)世間から遠ざかってひっそり住んでいる様子が、いかにもしみじみと感じられる。

(そのお方は)しばらくして出ておいでになったが、(私は)やはりあたりの様子が優雅に思われて、物かげからしばらく見ていたところ、(この家の主人は)引き戸を少しあけて、月を見ている様子である。(もしも、客を送り出したあと)すぐに戸を閉めて家の中に入ってしまったとしたら、どんなにか残念であつたことだろう(そんなことをしないでくれてよかった)。(客の帰つた)あとまで見ている人がいようとは、どうして知っているだろう(知るよしもないから、この行為は、自然に行つたものなのだ)。このようなことは、まったく普段の心がけによるものに違いない。その人はその後まもなく亡くなつてしまつたと、聞きました。

## 解答

- 問1 ① 〓 私は、あるお方に誘われ申し上げて  
 ② 〓 そのあるお方は供の者に取り次ぎを頼ませて、その家にお入りになった

- 問2 ③ 〓 ウ) ④ 〓 イ) ⑤ 〓 イ) ⑥ 〓 ウ)

問3 すぐに戸を閉めて家の中に入ってしまったとしたら、どんなにか残念であったことだろう。〔解答例〕

問4 (エ)

問5 (エ)

## 現代語訳

(旧暦の)五月頃に、夜が更けるまで、(私が)物語を読みながら起きていたところ、どこから来たのかもわからないが、猫がとてもなごやかに鳴いているのを、びっくりして見ると、たいそうかわいらしい猫がいる。どこからやって来た猫なのかと(思って)見ていると、姉である人が、「しっ、静かに、人に(この猫のことを)聞かせてはならない。とてもかわいらしい猫だ。(私達二人で)飼おう。」というと、(その猫は)たいそう人なれた様子ながらそばで伏せている。猫を探している人がいるのか、とこの猫を隠して飼っていると、まったく使用人の近くにも寄らず、じっと私達姉妹のそばにだけいて、食物もきたならしいものはよそへ顔を向けて食べない。私達姉妹の中にじっとまとわりついて(私達が)おもしろがり、かわいがるうちに、姉が病気になることがあり騒々しくて、この猫を北面(の部屋の中)ばかりに置いてこちらに呼ばないと、猫はうるさく鳴きたてたが、やはりそのままそこに置いておこうと思っていると、病気の姉が、はっと目を覚まして「どこなの、猫は。こちらに連れて来なさい。」というので、(私が)「どうしてか。」と聞くと、「夢の中にこの猫が出てきて『私は侍従大納言の娘(でその娘)がこのようになっているのである。そうなるはずの因縁が少しあって、この家の次女(様)が非常に(私のことを)いとおしく思い出しなさるので、ほんの少しここにいるのに、近頃は召使いの中において、たいそう辛いこと。』と言って、ひどく鳴く様子は、優雅で風情のある人のように見えて、はっと目を覚ましたところこの猫の鳴き声であったのが、とても気の毒である。」と話しなさるのを聞くと、とても悲しい。それから後は、この猫を北面にも出さず、大切に思い世話をする。(私が)ただ一人にいる所に、この猫が対座しているので、なでながら「侍従大納言の姫君がおいでになっっているのだなあ。大納言殿にこのことを知らせ申し上げたい」と言葉をかけると、(猫は私の)顔をじっと見つめながら、なごやかに鳴くのも、心なしか、突然見た目の迷いか、普通の猫とは違い、私の言葉を聞いてよくわかっているようで、しみじみといとおしい。

解答

問1 A ㉠ びっくりして・⑤ 目を覚まして

B ㉡ かわいらしい・⑦ 風情のある(趣のある)

C ㉢ ⑥ いとおしい・⑧ 悲しい

問2 「な」禁止の終助詞 問3 あらめ

問4 「ない」・「かいなで」 問5 中の君

問6 侍従大納言の姫君がおいでになっているのだなあ。私は大納言殿に(姫君のことを)知らせ申し上げたい。

問7 すべてく食はず

解説

問1 Aの「おどろく」は最重要古語である。意味としては、1びっくりする・はっとしてそれに気づく、2目を覚ます、の二つがある。①は夜が更けるまで物語を読みながら起きていて猫の鳴き声が聞こえてきたので1である。⑤は姉が夢を見てその後のことなので2である。Bの「をかしげなり」も重要古語であり、意味として1かわいらしい、2いかにも風情がある・趣がある、の二つがある。②は猫についての描写なので1である。⑦は、すぐ上に「あてに」(優美だ・優雅だ)があるのでそれに続くのは2である。Cの「あはれなり」は、うれしいにつけ悲しいにつけ人物、自然や事物にふれてしみじみと身にしみる感じを表す語で、文脈により様々な意味となる。⑥は筆者(中の君)が亡くなった大納言の姫君を思い出す折にどのように思い出すか、ということなので「慕わしい」「いとおしい」などが相当する。⑧は、姉の夢の話聞いて、大納言の姫君の生まれ変わりと考える猫を冷たくあしらっていたことなどに対し「悲しい」、「気の毒だ」などが相当する。

問2 自分の家の猫ではない猫を黙って姉妹二人で飼おうとしており、この猫のことを「人に聞かせてはいけない」という禁止表現と  
なるのでサ行下二段で活用する使役の助動詞「す」の終止形の下に接続しているのが、禁止の終助詞の「な」である。

問3 補う省略語はすでに指定されているので、あとはどのように活用させるかである。傍線部④の中に「こそ」があるので「む」を  
已然形にする必要がある。なお、この「む」は未然形に接続するので「あり」は「あら」とせねばならず答えは「あらめ」となる。  
この問題は係り結びの法則を確認させるものであるが、助動詞の接続や活用も正しく覚えておかないとできない問題である。

問4 設問は「イ音便」を探すというもので、「い」が語中・語尾にあるものを探していくとよい。本文中では「ないたるを」と  
「かいなでつつ」のころしかないので該当箇所はきまったが、単語で抜き出すという条件にあう形で答える。「ないたるを」は  
「鳴き+たる+を」の「鳴き」が下の存続の助動詞「たる」に接続してイ音便となっており、従って「ない」が答えである。「かい  
なでつつ」は「掻き撫でつつ」の「掻き」がカ行四段活用の動詞で、それがタ行下二段活用の動詞「撫づ」に接続し、複合動詞と  
なるときにイ音便となり、この複合動詞は一語扱いとなるので、「かいなで」と答えることになる。

問5 筆者を表す語は地の文にはない。そうなると会話文から探すしかなく、「中の君」という語が候補となる。「中の君」とは貴族の  
次女のことを指して言う語である。本文では姉と会話している筆者が次女と考えられるので、やはりこれが解答である。

問6 傍線部は二文からなっているので、一文ずつポイントとなる部分を確認していこう。初めの文の一番目のポイントが、「姫君の」  
の「の」であり、下に述部があるのでこれは主格の格助詞と判断する。次のポイントは「おはする」である。これは「行く」「来」  
の尊敬語「おはす」の連体形で、ここは亡くなった侍従大納言の姫君が猫となりこの家の筆者や姉のもとに「やって来ている」の  
で、「おいでになる・いらっしゃる」でとることになる。そして最後のポイントは、文末の「な」である。これは格助詞の「と」  
や文末の語に接続する詠嘆の終助詞であり、「〜ことよ」「〜だなあ」と訳す。全体で「侍従大納言の姫君がおいでになっているの  
だなあ」と訳す。第二文の最初のポイントは、「知らせ奉ら」の「奉ら」であり、これは動詞の下にしているので、「〜申し上げ  
る」「〜して差し上げる」の意の謙譲の補助動詞「奉る」の未然形である。次のポイントは、この「奉ら」に接続している「ばや」

である。未然形に接続する文末の「ばや」は自己の願望を表す願望の終助詞で「〜したい」と訳す。全体で「大納言に（姫君のこ  
とを）知らせ申し上げたい。」となる。

#### 問7

傍線部の「例の猫」は、「普通の猫」と訳し、そのような猫と違いを見せる猫は亡き侍従大納言の姫君の生まれ変わりであるな  
らば、その猫には高貴などころがあるはずで、そのあたりのことが述べられているのが「すべて下衆のあたりにもよらず顔そ  
むけて食はず」の部分である。

出典：『徒然草』第七段 / オリジナル問題

## 現代語訳

あだし野の露が消える時がなく、鳥部山の煙が立ち去らない、といったように（人間の寿命が尽きることがなく）、いつまでも（世の中に）生き長らえるきまりならば、どんなにか物の情趣もないことであろう。この世は無常であるのがよいのである。（一体）生命のあるものを見ると、人間くらい長生きをするものはない。かげろうが（朝生まれ）夕方にならないうちに死んでしまい、夏の蟬が（夏だけの命で）春や秋を知らないというような（短命な）ものもあるのだよ。（これを考えると）心しずかに一年を過ごすくらいの間でも、ずっとのんびりとした気持ちができるものだ。（反対に）いつまで生きても不足で、死ぬのが惜しいと思うならば、たとえ千年生きていたとしても、まるで一夜の夢のようなはかない気持ちができるだろう。永遠に生きていることはできないこの世で、（歳をとって）醜い姿を待ち迎えることができても、なんにならるか（いや、なんにもならない）。（古人も言ったように）長く生きれば、恥をさらすことが多い。たとえ長くても、四十歳に足りないぐらいで死ぬようなのが見苦しくないにちがいない。その年ごろを過ぎてしまつと、（醜くなつた）自分の容姿を恥ずかしいと思う気持ちもなく、人中に出て交際しようと思つたり、夕日のように余命いくばくもない身であるのに子や孫のことを心配して、かれらが榮えてゆく将来を見とどけるまでの命を望んだり、むやみに世の名誉や利益をほしがる心ばかりが深くなつて、物事の情趣もわからなくなつていたりするのは、まことにあきれられるほどいやなものである。



問 1 ① 〓 さまざま (きまり) であるならば ④ 〓 満足せず ⑦ 〓 期待し (望み) (いずれも解答例)

問 2 かげろうが夕方にならないうちに死んでしまい

問 3 ③ 〓 ひととせ ⑤ 〓 ちとせ ⑥ 〓 よそぢ (よそじ)

問 4 (1) 〓 打消・「ず」・連体形 (2) 〓 推量・「む」・已然形 (3) 〓 推量・「む」・連体形

(4) 〓 完了・「ぬ」・已然形 (5) 〓 婉曲・「む」・連体形

問 5 (a) 〓 たとえ長くても、四十歳に足りないぐらいで死ぬのが見苦しくないにちがいない [解答例]

(b) 〓 むやみやたらに世の中や人生を貪欲に生きる気持ちばかりが深く [解答例]

むやみに世の名譽や利益をほしがる心ばかりが深くなって [別解例]

問 6 (エ)

出典：『宇治拾遺物語』〈巻一〇ノ五 播磨守子サダユフガ事〉の全文 / 京都女子短期大学・改

## 現代語訳

今となつてはもう昔のことだが、播磨守公行の子に、さだゆふ(「佐大夫」といつて、五条あたりに住んでいたものは、現在も生きてゐる、あきむね(「顕宗」という者の父親である。そのさだゆふは、阿波守(「現在の徳島県一帯の国司」であるさだなり(「定成」)の供として阿波へ下つた途中、その道中で亡くなつた。そのさだゆふは、河内前司といつた人の親類である。

その河内前司の家に、黄まだらの牛がいた。その牛を知り合いの人が借りて、車をつけて淀にやつたところ、樋爪橋の上で、牛飼が下手にあつかつて、車の片輪を橋から落としてしまつて、そのはずみで、車も橋から落ちかかつたのを、車が落ちると思つて、牛が足を踏んばつて立つたので、革緒が切れて、車は落ちてこわれてしまつた。牛だけは、橋の上にとどまつていた。誰も乗っていない車だったので、死傷した人もいなかった。「つまらない牛であつたなら、車に引かれて落ちて、牛は死傷したことであろう。なんと力強い牛だろう」と、そこにいた人々はほめた。

こうして、この牛を大切に飼つていたが、どういふわけになつたのか誰にもわからないまま、牛は姿を消してしまつた。(河内前司は)「これはいつたい、どうしたことか」と方々あわてて探したが見つからなかつた。「綱から離れて逃げたのか」と思つて、近くから遠くまで探させたが、見つからないので、「すばらしい牛を失つてしまつた」と嘆いてゐるうちに、河内前司の夢の中に、さだゆふが現れたので、「この男は海に落ちて死んだと聞いていたが、どうしてやつてきたのだろう」と、不思議に思ひながらも行って会つてみると、さだゆふが言うことには、「私は(死後)この家の北東のすみの方にいます。そこから日に一度は樋爪の橋(の水辺)へ行つて苦しみを受けております。ところが罪が深くて、身体が重いものですから、乗物が支えきれないので、歩いて行くのも苦しいため、この黄まだらの御車牛は力が強く、それに乗っておりますが、(あなた(「河内前司」)が)たいそうお探させになつていらつしゃいますので、いまから五日のち、六日目の午前十時ごろ、お返し申しあげます。そんなにお探しなさいますな」といふ夢を見て目が覚めた。(河内前司は)「このような(不思議な)夢を見たものだ」と人に言つて時がたつた。

その夢を見てから六日目の午前十時ごろ、どこからともなく、この牛が姿を現して門から入つてきたが、とても大変な仕事をしてき

たという様子で、苦しそうに舌を垂れ、汗びっしょりで入ってきた。「あの樋爪の橋で車が落ちて、牛だけが踏み止まったちよどそ  
の機会に（さだゆふの霊が）行き合わせて、なんと力強い牛かと見てとって、借りて乗り歩いていたのであろうかと思うにつけても、  
恐ろしいことであった」と河内前司は（人々に）語ったのであった。

**解答**

問1 ① ㊦ ② ㊧ ③ ㊦ ④ ㊦

問2 (a) ㊦ (b) ㊧ (c) ㊧ (d) ㊦

問3 A ㊦ B ㊧

問4 えせ（本文7行目）

問5 (2) ㊦ そんなにお探しなさいますな

(3) ㊦ とても大変な仕事をしてきたという様子で〔いずれも解答例〕

問6 始め ㊦ おのれが 終わり ㊦ 苦しきに

問1 傍線部①について。「いたはり」の終止形は「いたはる」。意味は現代語とほぼ同じで、「大切にする・丁寧に扱う・かわいが  
る。」などである。「かふ」は「飼ふ」。従って、(イ)が正解。

傍線部②について。「たへず」は動詞「たふ」に打消しの助動詞「ず」が付いたもの。「たふ」を漢字で書くと「堪ふ・耐ふ」。  
意味は「負けないで耐え忍ぶ・もちこたえる・十分能力がある。」など。選択肢を見てみると、この意が含まれているのは(エ)しか  
ない。

傍線部③について。基本中の基本。できなかった人はよく復習しておくように。また、時間だけでなく、方位も十二支で表され  
るので、併せて確認しておくといいであろう。

傍線部④について。「すずろ」とも言う。現代語の「気もそぞろに」などの用法から、(ウ)を選んだ人もいるかもしれないが、古  
語の場合は、「これといった目的や理由もないのに、自然に何かをしたり、ある状態になったりすること」をいい、「わけもない・  
関係がはっきりしない・思いがけない・つまらない。」などの意味で使われるので、要注意。ここでは牛のやってきた状態に対し  
て使われているので、(オ)が適当と判るであろう。

問2 傍線部(a)について。「心得」が「て」で接続している先を見ると、「……心得て、――↓牛の踏みひろごりて・立てりければ……」

と、二つの動作と結ばれている。ここから「心得て立つ」ていたものを探せばよいことがわかる。従って、「牛」が主語となる。

傍線部(b)について。まず、傍線部を現代語に訳してみる。傍線部は、「尋ねもとめ／さすれ／ども」と品詞分解できる。「さす  
れ」は、「ども」の上にあるから已然形であるが、終止形は「さす」で、使役・尊敬の意を表す助動詞である。ここでは、「給ふ」  
などの尊敬語とともに使われていないから、使役の意を表していると考えられる。したがって、傍線部の意味は、「探させたが」  
となる。そこで、何を探させたのかといえ、前の行に出てくる「失せたる」牛である。なくなった牛を探させるのは、当然牛の  
飼い主である。従って、答えは(ウ)。

ここで、解答を(エ)「河内前司の召使」にしてしまった人がいるかもしれない。確かに「探す」という行動を実際にしたのは、  
「召使」であるが、使役の「さすれ」がついているから、だれかが「召使」に「探させている」のである。それは、その主人「河  
内前司」である。

傍線部(c)について。傍線部「いひて」の言った内容は、直前の「かかる夢をこそ見つけ(〓このような〔不思議な〕夢を見たものだ)」である。従って、傍線部の主語は夢を見た人だと判る。文章を前に辿っていくと、「河内前司が夢に見るやう」という文にぶつかるだろう。つまり、この主語は河内前司である。

傍線部(d)について。傍線部の前を追っていくと、「牛は」とあるが、傍線部の直前は「……折なんどに行きあひて」となっており、傍線部を含む会話文の冒頭の「この植爪：折なんどに」までは「行きあ」った状況を述べていることになる。つまり、「この植爪の橋で：牛が踏みとどまった折に行きあった」のであるから、「牛」は主語ではない。そこで傍線部より後を見てみる。傍線部は「て」で、「見て」に接続している。更に「借りて乗りて」に接続している。つまり「行きあつて、見て、借りて乗る」となる。この「見て」は、「力強き牛かなと」と、思考内容を引いているので、「思って」の意だと判断できる。すると傍線部(d)「行きあった」人物、つまり主語は、この牛(力強き牛)を「借りて乗」った人と同人物だと判る。「牛」を「借りて乗」っていたというのは、16行目の「返し奉らん。」と言っている者(借りる↑↓返す)なので、この「返し奉らん。」の会話の発言者、「さだゆふ」が、「借りて乗」った者とわかる。従って、答えは(ア)。

**問3** A 空欄の前に追っていくと、空欄の含まれている一文の冒頭に、「えせ牛ならましかば、……」とある。ここに着眼すれば即答できる。「……ましかば……」の形は、「もし……だつたら……だらう」という意の反実仮想を表す定型構文である。

B 空欄の直前の「にやあり」に注目。これは挿入句を作る典型的な表現である。「にや」と、補助用言以下が略される場合が多い。これは「断定の助動詞『に』+疑問の係助詞『や』+補助助動詞『あり』+推量の助動詞『む系(む・けむ・らむ)』』という定型を取る。選択肢の中から「む」系の助動詞を探すと、(ウ)の「けむ」しかない。

**問4** 「いみじ」は程度が甚だしいことを表す語で、良い意味にも悪い意味にも使われる。ここでは、その直後に「……を失ひつる」となげく程に」とあるので、良い意味に使われていると判断できる(第二段落のエピソードが把握できていれば簡単だ)。つまり、この「いみじ」は「すばらしい」の意味である。これと反対の意味の語を探せばいいわけだ。問3の空欄Aの所で反実仮想ができてきたが、これは現実とは反対のことなので、ここで使われている牛に対する形容語「えせ」が、「いみじ」の意味に相対するものだとつかめよう。

問5 傍線部(2)について。この部分の訳のポイントは「……な……そ」である。この形で(哀願を含んだ)禁止を表す。「いたく」は「たいそう、(下に打ち消しを伴って)たいして」の意。「もとむ」は傍線部(b)にもでてきたが「探す」の意。「給ふ」は尊敬の意を表す補助動詞である。

傍線部(3)について。「いみじく」は問4で見た通り「すばらしく」でもよいが、連用形で形容詞・形容動詞に続く場合には、「たいそう」という程度の副詞のような使われ方をする。この問題でのポイントは「大事したりげに」の部分。「大事」という名詞に、「したり」と「サ変動詞+完了の助動詞」が付き、これに「いかにも」のように思われる」という意を加える接尾語「げ」が加わった形容動詞である。つまり、「いかにも大事をしてきたように思われる様子で」となる。ここでの「大事」は、「牛」のしたこたであるので「一大事」ではおかしい。これは、車がつぶれる程の重さ(＝さだゆふ)を運び、「苦しげに舌たれ、汗水にて……」と形容されていることから、「大仕事」ぐらいの意で捉えればよい。従って、直訳は「いかにもひどく大仕事をしてきたような様子で」となる。これをこなれた言い方にしたのが、解答例である。

問6 まずは、誰が借りて乗り歩いていたのかだが、これはさだゆふである。さだゆふが牛を借りた訳は、河内前司の夢の中で話しているの、そこから該当箇所を探せばよいと見当がつこう。そこで会話をしてみるが、「このあめ…乗りて侍る」(14～15行目)が、牛を借りたことを言う。直前の「かちよりまかるが苦しき」とこの部分との関係は「徒歩では苦しい」→「牛(乗物)を借りた」で、順接。従って、直接の中心理由になっている。ここから逆上って考えると、直前の「乗物のたへずして」はこれと直接に結びついているので取る。その前の「身のきはめて重く侍れば」は「かちよりまかるが苦しき」に対する理由になっているので、これも取る。その上の「おのれが罪の深くて」だが、「罪が深い」→「身が重い」の繋がりを考えれば、ここも取ると判断していいだろう。さだゆふが、生前太っていたか否かは、この話からだけでは判らないが、それでも、歩くのも大変なほどだというのは、この「大変さ」も仏罰の内であると考えられよう。ところがさだゆふは、牛を乗物として使うことによって、楽をしたのである。仏罰をもごまかしてしまう、人間の業の深さとも言うおうか、この辺りにこの話の面白さはあるのである。



## 【添削課題】

出典…大庭健『私はどうして私なのか』／名古屋学院大学

## 文章略解

幼児にはさまざまなものが見えているが、自分の姿・顔を見ることはできない。したがって、鏡の前に立った幼児は鏡に映っているものを見て、自分の姿だと認識できず困惑することになる。では、自分が見えるものであるということは、どうやって意識されるのだろうか。それは他人を見ることによって他人を意識し、また逆に他人に見られることによって自己を意識することによって成立するのである。そこではじめて自他の区別が成立し、鏡に映る像は他人に見えている自己の姿だと理解できるようになるのである。

## 解答

問1 自分を見ている人〔20行目〕

問2 D      問3 A      問4 E      問5 B

問6 事物の存在はそれが見えることにより担保されるが、自分を自分で見ることはできず、他者が見ている自分の姿を知ることから

自己の存在を確認するほかないから。〔74字・解答例〕

## 特別問題

幼児にはさまざまなものが見えているが、鏡の前に立った幼児は鏡に映っているものを自分の姿だと認識できず困惑すること



なる。自分が見えるものであるということは、他人を見ることによって他人を意識し、また逆に他人に見られることによって自己を意識することによって成立するのである。そこではじめて自他の区別が成立し、鏡に映る像は他人に見えている自己の姿だと理解できるようになるのである。(一八七字)

出典：金塚貞文『眠ること 夢みること』／横浜国立大学

文章略解

眠りは、かつては動物の眠りと同じく、生存のための利益にかなった行動であったが、現代では、眠りは誅<sup>いぶか</sup>しいもの、道徳的価値的に劣っているものと思われるようになった。眠りについてのこのような考え方は、工場労働力や資本主義の誕生とともに、労働しないことは人間の本質に悖<sup>もと</sup>るといふ労働倫理が確立されるに至り、その貴重な労働を中断する眠りは、無駄であり怠惰であるとして、軽蔑され敵視されるようになったのである。

解答

問1 ①〃あいまい ②〃加味 ③〃狩猟 ④〃けいべつ ⑤〃妨

問2 狸寝入り・惰眠〔2行目〕

問3 目覚めていても何もしなければ、無駄な時間を過ごすことになり、眠りだけが無駄だとは言えないから。〔47字・解答例〕

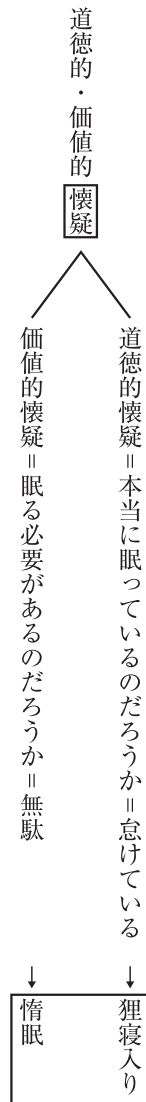
問4 真偽と必要性が疑問視され、無駄で怠惰なものとして軽蔑されるような眠り。〔解答例〕

〈別解〉 道徳的価値的嫌疑がかけられ、無駄で怠惰なものとして軽蔑されるような眠り。

〈別解〉 歴史的社会的産物である、人生にとって無駄で怠惰なものとして敵視されるような眠り。

問5 労働こそが人間の本質であり、労働を中断する眠りは怠惰で無駄な時間と考えたから。〔39字・解答例〕

問2 傍線部(a)の「……道徳的に劣っている、……価値が低いかに思われている」は、直前の段落に出てくる「道徳的価値的嫌疑」を言い換えたものである。そうすると、この段落冒頭の「ということとはつまり」を捉えて、「道徳的価値的嫌疑」の具体的な説明が第一段落にあることが理解される。第一段落の中段では、「訝しい眠り」＝「眠りに対する道徳的ないし価値的な不信感」＝「眠りに対する道徳的価値的嫌疑」という言い換えが行われている。ここから、この設問は結局、「訝しい眠りを一言で何と言っているか」というものと分かる。ここまで押さえた上で、解答に関係する部分を図示しておく。



問3 この問題は、直接的には、「尖锐なものではない」と筆者が考えている理由を訊いているので、それを述べている部分を探すことになる。すると、傍線部(b)を含む段落の次段落で、「眠りを無駄や怠惰と結びつけるほど尖锐なものではない」と述べている一文に出会うはずだ。さらに、これの直後には「というのも、くからである」というように、この文を承けて理由を述べている一文が付いている。従って、この一文を利用して解答を作成ことになる。が、この一文がそのままでは使えないことに気づくだろうか。この一文は、「目覚めていても何もすることがないときに眠るのは無駄ではない」と述べているが、これがどういうことを考える必要がある。この辺の文脈を辿ると、「く」という『人生観』は……道徳的意識、価値観の根柢となり得るものではない。しかし……眠りを無駄や怠惰と結びつけるほど尖锐なものではない」となっている。ここで一度設問に立ち返り、「死の意識が、眠りを無駄とみなす観念を生み出す」という「解釈」が「尖锐なものではない」理由を問うていることを押さえておきたい。

傍線部(b)の後の部分で「こうした解釈は、……『人生観』を前提にした上で成立し得る」と述べている。従って、「目覚めてい

でも何もすることがないときに眠るのは無駄ではない」というのは、『解釈』ではなく、『前提』に対する反証になっている。従って、先に捉えた理由も一歩推し進める必要がある。この『解釈』は、傍線部(b)の直後に具体化されている。それを『前提』を含めた形でまとめると「人生は目覚めによって開始され、眠りによって中断されるので、眠る時間は限りある短い人生では無駄な時間である」となる。そうすると、この『解釈』の論点は、「人生(生命)≡活動(何か行動する)時間」という点にあることが判るはずだ。そうしたら「死≡何もしない時間」と捉えていることもつかめるはずだ。ここから先の理由を見ると、「目覚めていても何もすることがない(≡活動できない)ときに『眠る』のは、『眠り』という行動を採っている時間であり、何もしていない時間、すなわち『無駄な時間』ではないのだ」という論理がつかめる。このことを「というの、……からである」の一文に続く部分で説明しているのである。ここを簡単にまとめると「動物は何もすることがないときに生存のための利益(↓無駄の対義)にかなった最良の行動として『眠り』を選ぶので、人間と同等の『人生観』を持っていてもそれを無駄とみなす観念は生み出さない」となる。

よって解答は、「目覚めていても何もすることがない(活動できない)ときに眠るのは、『眠り』という行動を採っている時間であり、何もしていない時間、すなわち『無駄な時間』ではないから」というように書ける。これを五十字でまとめるとよい。本文に即した形では、解答例のような記述になるだろう。高度に抽象化した解答ならば、「眠りも人生の中の一つの行動であるならば、その時間は無駄に何もしていない時間ではないと考えられるから。〔五十字〕のようになるだろう。

ちなみに、『死の意識が、眠りを無駄とみなす観念を生み出す』という、『もつともらしい解釈』を、『尖锐なものではない』と考えている」という設問の部分を作り易く解釈すると、『生命活動を停止してしまうのが死であり、行動することが人生の証である』という捉え方が、行動をしていない時間である『眠り』を人生の中ではいらぬ時間だとイコールに捉える考えを作り出すという、多くのひとが一見納得しそうな考え方を、積極的に他の反証を打ち破れるほど目ざましく強く主張できる論拠にはなっていない」と言い換えることができる。

#### 問4

傍線部(c)は、その直後で「真偽と必要性が疑問視される眠り、即ち、訝しい眠り」と言い換えられているので、ここを中心に解答を作ればよい。文中に、同内容のことが、いろいろな言葉で表現されているので、さまざまな解答の表現が考えられようが、根本的には、「動物的な眠り」に対するものだということを押さえる必要がある。

問5 傍線部(d)と、この直後「そ〔眠り〕の真偽が、そ〔眠り〕の必要性が厳しく吟味されねばならない」が同義関係にあることを先ず押さえる。これは要するに、「眠りが無駄なもの、怠惰なものとして軽蔑され敵視されたこと」であった。これを設問に当てはめてみれば、「工場労働によつて、眠りが無駄なもの、怠惰なものとして軽蔑され敵視されるようになったのはなぜか」と、問うていることになる。この「工場労働」と「眠りが無駄なもの、怠惰なものとして考えられたこと」との関係は、この傍線部(d)を含む段落の冒頭で述べられている。「工場労働の誕生と、それに見合った労働倫理の確立、それが結びつけた」とある。つまり、「工場労働に見合った労働倫理の確立が、労働しない眠りは無駄で怠惰な時間と考えるようになったから」という理由が導けるだろう。これを具体化する。これは、43〜45行目で述べられている「人生は労働に時間ではない」に当たる。これを要約すると、「人間の本質は労働であるから、労働を中断する時間となる『眠り』は、人間にとつて本質的に無駄な時間であり、怠惰な時間である」となる。

これが直接の理由になっているので、この文末に「から」を加え、さらに要約すれば、解答例のような答になるだろう。







|      |  |
|------|--|
| 会員番号 |  |
|------|--|

|    |  |
|----|--|
| 氏名 |  |
|----|--|